

## 京都大学読史会の思い出

——一九四一年から一九五〇年を中心に——

直木 孝次郎

### はじめに

今年（二〇一〇年）は京都大学の読史会がはじまって百年目です。小葉田淳先生（二八年）<sup>①</sup>が、読史会は明治四三年（一九一〇）、国史学科の第一回卒業生の西田直二郎先生たちが卒業した時の二二月に発足した、と発足より五十年目にあたる一九六〇年の前年に刊行された『国史論集』<sup>②</sup>の序に書いておられます。この本は上下二巻、読史会の会員（京大国史学科卒業生）一一一名の論文を収め、総ページ千八百余の大著です。

小葉田先生の序には、読史会は、はじめ学生有志の史料講読の集いに始まり、卒業生・学生の増加にともない、研究発表を主とするようになり、毎月の例会のほか、秋季に大会を行ない、随時公開討論会や見学旅行を試みるなど、学会として活動を示すよう

になった、と書かれています。こうした研究活動にあわせて、読史会は教官・卒業生・学生の親睦の会でもあり、秋季大会には会員の懇親会を催した、ともあります。以上の内容については多少の消長<sup>③</sup>はありますが、研究と親睦の会という性格は、いまでも変わらず続いていると思います。

私がこの会から受けた恩恵は限りなく大きいのですが、私は一九四一年（昭一六）に京大に入学し、卒業後二年間軍隊に服役し、戦後は一九五〇年まで、軍隊の期間を含めると前後約十年間、とくに読史会のお世話になりました。本日は主としてその間の読史会の思い出を話させていただきます。

### 一 読史会での初めての発表と清水三男さん

読史会の名をはじめてはつきりと認識したのは、入学した翌年

の四二年四月、読史会による新入会員の歓迎会の時ではないかと思えます。当時は一回生のときは史学科に属し、二回生になる時に専攻に分れました。その時の歓迎会の場所は、貴船の川魚料理の店でした。大学にはいると立派な所です、大学生になるとお金がかかるなあと思ったものです。

入学した時には、文学部史学科主催で歓迎会があります。私が二回生になったときは、北京留学から帰ってこられた山根徳太郎先生（二八）の「北京のお正月」という話がありました。岸俊男君（四四）は、私より一年下で、この時入学したばかりの一回生でしたが、私の同級生に岸君の出た第三高等学校（通称三高）の一年先輩の友人が<sup>④</sup>おり、その紹介で岸君と相い知ることになりました。

二回生になった四二年の五月か六月の読史会の例会で、私は法隆寺再建論に関する発表をしました。その報告は四三年に『美術史学』という雑誌に載せてもらい、戦後、拙著『奈良時代史の諸問題』（塙書房、六八年刊）に「法隆寺の食堂と講堂」という題<sup>⑤</sup>で収めました。この発表で私は学究生活のスタートを切ったことになりました。

当日の会の出席者は二十人前後でしたが、西田先生や上代美術史の東伏見邦英先生（のち滋洽。当時講師）がご出席で、相当緊

張して発表しました。この日、私のつきには十三年先輩の清水三男さん（三一）の「保」についての発表がありました。その数日後、史学科の図書閲覧室で偶然清水さんにお会いしたら、清水さんは「このあいだの発表はなかなかよかつたよ」と褒めて下さり、さらに「あれを『史林』に載せられたらよいのだが、このごろは『史林』も減ページでねえ……。」とつけ加えられました。『史林』に載る載らぬは別にして、このすぐれた先輩に褒められた嬉しさは長く忘れることができません。いまま鮮明におぼえています。

これを機会に清水さんのもに出入りして、教えを受ければよかつたのですが、当時は戦時中の繰りあげ卒業のため、二回生の期間は半年で、何かと気ぜわしく、清水さんのお宅へ伺ったりはしませんでした。当時私は、清水さんのことは詳しくは知りませんでした。古文書室でひとり黙々と研究に打ちこんでおられる様子や、清水さんの後輩で私には先輩に当る方々の態度から、清水さんは偉い先輩と感じていました。戦後になってから知ったことですが、清水さんは一九三八年に治安維持法違反の疑いで検挙され、有罪の判決をうけ、執行猶予で釈放されましたが、警察の監視下にあり、大学内では自由に研究をしておられましたが、特定の学生と親しくすることは避けておられたかもしれせん。

そして私の法隆寺論を聞いて下さった翌年の四三年二月に陸軍に召集され、千島列島の先端のシユムシユ島の隣りのホロムシロ島で軍務に服し、敗戦後シペリヤに抑留されて労役に従事、四七年一月、帰国のめどがついてウラジオの近くまで帰った時、病氣となり、ウラジオ近郊のスーチャン捕虜収容所で病没されました。⑥  
享年三九です。清水さんが帰国されたら、新年度から京大の非常勤講師を委嘱する予定であると、私は柴田実先生（当時助教）から聞いていました。まことに痛恨にたえません。

## 二 読史会の例会・大会・旅行

先に申しましたように読史会は親睦をも目的としますから、先輩と後輩の交流の場でもありました。毎年一度の研究室の見学旅行は、教官と学生が主体ですが、そのころは時間に余裕のある大学院生やその他の若い卒業生は、現在よりも気軽に参加し、先輩・学生の交流の場となっていたと思います。私が二回生の時の紀州への旅には、六年上級の林屋辰三郎さん（二三八）が参加され、和歌山県の田辺から熊野本宮に近い湯の峰温泉まで、中辺路をバスで行く車中で、同期の友人たちと談笑しておられたのを思い出します。林屋さんは大学の副手でしたが、京都の堀川高女の非常勤講師もしておられ、授業のやり方、たとえば河が屈曲して流れ

る蛇行イソングターの説明のしかたを、愉快そうに話しておられました。

年に一度の大会のあとは、出席者有志の懇親会となります。古い先輩もお見えになり、二七年（昭二）に卒業の肥後和男さんに初めてお会いしたのはこの会でした。肥後さんは戦後の教授追放が取り消されて間もないころで、東京文理科大学に復職されていたと思いますが、追放で職を失った四、五年は食べるために原稿を書きまくったという話をしておられました。

懇親会の会場は、現在は洋風のテーブル式ですが、そのころはむろん座敷に座ぶとん、胡座あぐらでした。話題は学会や友人・先輩のこと、或いは時局に関することで、今とあまり変らないと思います。たまたまには遊び上手の先輩が猥雑な歌を披露して興をもらいあげることがありました。その歌は、たとえば、

女の木登り 下からのぞく たしかに見える傷のあと 刀の  
傷か弾丸たま傷か あれは……（以下省略）

というようなものですが、そんなことはめったにありません。席が洋風となり、女性の出席者が多くなった現在とは、まれであるとはいえ、そうした点が変わったと思います。

### 三 京都大学と東京大学の学風の差

戦後しばらくのうちに、西田先生は一九四六年に、中村直勝先生（一五）は四八年に教職不適格（いわゆる追放）のため、大学を退ぞかれ、そのあと小葉田先生が一九四九年に京大教授となられました。はじめは東京文理科大学と兼任で、東京にお住まいで、京都に定住されるのは五〇年からです。それまでの数年は西洋史の原随園教授が国史の教授を兼ねられ、日常は助教授の藤直幹先生（二八）や柴田実先生（三〇）が読史会の中心でした。

柴田先生は、読史会の大会には地方の会員が多数出席されるから、京大で研究している者は、新しい研究の方向を示す研究を発表するべきであるというお考えのようでした。私はそのころ特別研究生として京大の研究室におりましたが、柴田先生の期待に答えられるような仕事ができたとは思えません。

しかし京大以外の大学の人で、いま京大ではどんな研究をやっているのかという関心を持って、大会にみえる方もあったようです。当時は学術雑誌は少なく、その上印刷に時間がかかったことも関係したと思います。私が大阪市立大学に職をえて、京大研究室を出たあとのことになりますが、五一年一月の大会に東大助教の井上光貞さんが来られたのも、そうした関心からかもしれ

ません。私はその大会で「壬申の乱について」という題で研究発表をしますが、それが井上さんの耳にとまって、会のあと、『史学雑誌』に投稿しないかとすすめられました。この時が井上さんとの初対面でしたが、すすめに従って投稿したのが、同誌一九五二年六月号にのった「壬申の乱の一考察」です。

読史会の大会は会員以外にも公開していますので、聴講にくる一般市民の方もあったと思います。戦後、日本古代史に強い関心を持っておられた作家の山本有三先生は、一九六〇年前後のことと思いますが、一度秋の大会を聴講されたことがあります（先生は『史林』の定期購読者であったかもしれませんが）。しかし大会でも読史会は同窓会的空気が強く、出席者の多くは発表者の意見を聞いておくという態度で、論争というほどのものは、今は知りませんが、そのころはめつたになかったように思います。私は一九五四年以後、山本先生の知遇をえており、この大会の一、二日あと、奈良ホテルでお目にかかった時、先生は、重要な問題が出されていても、それをめぐる論争が起らないことに不満を示されました。

しかし論争がまったくなかったわけではありません。それより少しあとの六五年前後であったと思いますが、鎌倉新仏教の浄土信仰についての発表があったとき、今まであまり発言されなかつ

た年輩の先輩たちが、つぎつぎ立って発言を求め、発表に対する反対や、それに対する反論が述べられ、読史会としては珍しく会場騒然という感じになりました。司会者もまとめるのに苦労するなかで、出席の会員のなかではおそらく最年長の山根徳太郎先生（二七）が、賛否両論の調停につとめるという状態でした。

鎌倉仏教にくらい私は、諸先輩の論争の意味が十分に理解できず、隣りにいた黒田俊雄君（四八）に、一体どういうことかと訊ねると、貴族仏教であった浄土教を革新したのは、浄土宗の法然か、一向宗の親鸞かという論争です、宗教戦争ですよ、と解説してくれました。私はなるほどと納得しました。

改めて考えるまでもなく、京大の国史学科には、少なくともそのころまではお寺関係の人が多い。西田先生はもちろん、赤松俊秀先生（三一）も本願寺系のお寺と関係があると聞きますし、朝鮮史・神話学の三品彰英先生（二八）もお寺です。柴田先生はお寺ではありませんが、仏教とも関係のある心学の家の御出身です。仏門出身の有力な先輩には井川定慶さん（二三）、南禅寺の桜井景雄さん（三四）などがおられます。中村直勝先生は仏門ではありませんが、大津市の神社のご出身です。藤直幹先生のように武家出身の方もおられますが、少数派です。私（四三）のクラスは十六人中、梅溪昇君などお寺出身が三人いました。

東京大学では、黒板勝美先生が佐賀藩、坂本太郎先生が静岡藩、井上光貞さんが長州藩、大久保利謙先生が薩摩藩、藤木邦彦先生が肥後の細川藩の武門のご出身です。家永三郎先生の家は、佐賀県藤津郡吉田村という山村で、半商半農を営んでおられたそうです。先生のお父さんは陸軍少将で退職された軍人ですが、先生の学風が東大の他の先生方とちがっているのは、いくらかはそうした家がらの違いにもよるのではないかと思われれます。読史会すなわち京大国史と東大国史の学風のちがいは、こういう所からも来ているといえるでしょう。

しかし京大でも東大でも、国史出身で教職についた方には、私のような商家つまり町人出身の人は、あまりおられなかつたように思います。戦後、私は作家の司馬遼太郎さんと親しくなり、著書を書いたところ、その本のどこかに私が商家出身であることを書いたからでしょう、司馬さんは、戦後になって商家出身の方が学者になる時代が来ましたが、といわれました。そういう私は私の友人で東大出身の国語学者大野晋君は、砂糖屋の出身です。司馬さんの目のつけ所は面白いなと思いました。

けれど、東大は知りませんが、京大では商家出身の学者は、戦前にもおられます。小葉田先生は福井県丸岡の商家のご出身です。林屋さんは宇治に茶園を持つ葉茶屋のご出身と聞いています。戦

後になりますと、今年文化勲章を受賞された脇田晴子さん（修士入学一九六〇年）は商家のご出身で、ほかにもいろいろおられます。

つけ加えますと、東大出身の古代史家青木和夫さんの御父君は、ヴァイオリン製作者<sup>⑫</sup>、早川庄八さんの家は東京で銀器防職を業とされた<sup>⑬</sup>と、町人だけでなく、職人の家からも学者の出る時代になったといえます。

#### 四 読史会と日本史研究会

ここで話題を変えます。戦後、京都では京大出身の藤谷俊雄さん（三七）や林屋辰三郎さんなどによって、一九四五年一月に日本史研究会が設立され、花々しく活動をはじめました。以下、読史会と日本史研究会の關係について私の感じていることを申し上げます。

思い出すのは、一九四七年の秋、この二つの学会が同じ日にそれぞれ大会を持ったことです。読史会は定例の大会ですが、日本史研究会は四十七年一月になくなられた清水三男さんの追悼会として、十一月二十三日に大会を開催しました。私は今まで十一月三日のことであったと思ひ、そのように書いたことがありますが、今度『日本史研究』の古い号にあたって調べてみると、十一月二

十三日<sup>⑭</sup>です。この日は現在は勤労感謝の日の祝日となっておりますが、それは一九四八年からで、それまでは新嘗祭<sup>にいなめまつり</sup>の祝日でした。

読史会もこの日に大会を行なう予定を立てていました。偶然同じ日に二つの大会がぶつかったのかもしれないませんが、日本史研究会が意識してぶつけて来たようにも思われました。会場は両方も京大の構内です。

日本史研究会の大会の講師には、和歌山県立田辺中学の教師の北山茂夫さんの名があつて、評判でした。北山さんは三四年（昭九）に東大を卒業し、三七年に「大宝二年の筑前国戸籍残簡について」という論文を発表されるなど、目ざましく活動されておられました。太平洋戦争がはじまり、ファシズムの勢力が強くなつた四三年に故郷の和歌山県に帰り、田辺中学に勤めて終戦まで雌伏の時をすごし、戦後もしばらくは田辺中学の勤務をつづけられました。前述の「筑前国戸籍残簡について」やその他の論文を集めた著書『奈良時代の政治と民衆』は、四八年に京都の高桐書院から発行されます。

さて大会の当日、私は清水さんの追悼の会でもある日本史研究会の方へ出たかたのですが、国史学科の特別研究生という立場からすると、研究室の助手岸俊男君の仕事を助けねばなりません。それで日本史研究会でなく、読史会の大会の会場の様子を見に行

きましたが、はたして学生や若手の大学院生などはほとんど日本史研究会のほうへ行つたと見え、出席者は例年より少なかったと思います。学部の二回生であった門脇禎二君（四九）や一回生の上田正昭君（五〇）は、日本史研究会のほうへ行つたということ  
です。

昼食休憩のとき、日本史研のほうは大盛況だという情報が伝わってきますが、どうにも仕方がありません。日本史研究会では予想どおり北山さんの話がとくに人気があり、北山さんが懐中時計の鎖をふりまわしながら熱弁して、聴衆を魅了したことは後々まで語り草でした。戦時中の鬱積した思いを一時に吐き出そうとされたのでしょう。北山さんの弟さんは沖繩で戦死しておられます。そうしたことも北山さんの熱弁の源泉になったのでしょうか。北山さんは、その後、四八年三月に田辺中学を退職し、四九年から立命館大学に迎えられます。

##### 五 戦時中の読史会の先生たち

——西田先生と中村先生——

日本史研究会がこのように読史会に対し、対立的態度を取つた理由の一つには、読史会の母体である国史研究室が保守的であったことへの反感があつたのではないかと思ひます。長く国史学科

におられたのは、いうまでもなく西田教授と中村助教です。私の考えでは、お二人とも大正から昭和初期にかけては、むしろ進歩的な面が強かったが、時代の進むとともに保守化されたように思ひます。

西田先生が一九二四年（大一一三）に学位を受領された時の論文は、「王朝時代の庶民生活」という題です。先生より少し若い東大教授の平泉澄氏は、保守的というより右翼的で、学生が卒業論文に農民の生活を取りあげたいと相談にくると、農民の生活に歴史がありますか、豚に歴史がありますか、と言つたという話は有名ですが、北山茂夫さんが東大の学生時代に卒論の相談に行つて、奈良時代の農民生活をテーマにしたいというと、農民の生活はいつの時代でも変りはない、われわれに大切なのは「上御一人」だ、と言つたそうです（北山さんの直話）。久しぶりに上御一人という言葉聞いたと仰有る方や、はじめて聞いた方があると思ひますが、もちろん天皇のことです。北山さんは、辻善之助先生の了解をえて、奈良時代の農民生活の卒業論文を書くことができたそうです。

西田先生はそういう平泉氏にくらべると、はるかに進歩的で、それは文化人類学や民俗学を早く歴史学に取り入れたところにも表われていますが、フアシズムが擡頭し、社会全体が右傾化する

ころから、保守的な面が強くなられたように思います。以下、お世話になった両先生に対し、批判がましいことを申し上げますのは申しわけないのですが、過去の歴史の事実にかかわることなので、お許しをねがいます。

保守化の契機となったのは、一九三三年（昭八）に起った瀧川幸辰事件（京大事件ともいう）ではないかと私は考えています。

ご存知の通り法学部の瀧川さんが左翼思想を持っているという理由で、文部省が瀧川さんを免職しようとした事件です。法学部はむろんこれに激しく反対し、京大全体の大きな騒ぎになりました。

このとき西田先生は、大学の新聞部長の職にありましたが、最近の『国史研究室通信』（京都大学文学部読史会発行、二〇一〇年刊四一号）に岩井忠熊さん（四八・三）が書いておられるように、『京都帝国大学新聞』に滝川事件に関する記事や評論を掲載することを禁止されました。これが戦後、西田教授は右翼的・保守的だと攻撃される理由の一つになります。しかし松尾尊允さん（五三）の研究によりますと、当時文学部の教授たちの空気は瀧川さんに対して冷淡で、たとえば良心的な教授として知られる哲学科の天野貞祐さんも、「瀧川のために文学部をつぶすわけにはまいらぬ」と言ったそうです。瀧川さんに味方すると、文学部から浮き上がってしまうという空気だったのでしょう。戦後西田先

生は、日本史研究会の創立委員の一人の藤谷さんからはげしく攻撃されますが、すこし酷ではないかという気がします。

しかし西田先生に保守的な面がこのころから出てくるのは、確かなようです。やはり藤谷さんの指摘ですが、一九四〇年（神武紀元二六〇〇年）に京大から出た『紀元二千六百年記念論文集』に、記紀神話を無批判に取りこんだ「天業恢弘<sup>16</sup>」という論文を書いておられます。また先生の弟子には、肥後和男さんをはじめ、小葉田先生や三品彰英先生・柴田実先生などすぐれた研究者がおられるのに、武家社会の構造や武士道の研究の藤直幹先生を一九三六年に助教授に採用し、後継者とされたことも、保守化と関係があるのではないかと、私はひそかに考えています。

中村先生の場合、話がこまかくなりますが、私の兄が三高一年生であった一九三二年（昭七）、三高の教授を兼任しておられた中村先生から『記紀』にみえる初期の天皇のはなはだしい長寿の連続は、紀年延長のための造作であるという話を聞いているのですが、二年のちの三四年に三高一年生であった横田健一さん（四〇）の時には、中村先生はそのことにふれられませんでした。勉強家の横田さんは、「初期の天皇の寿命がたいへん長いのは、事実でなく、作り話であるということを書きましたが、どうなのでしょう」と質問したところ、何ということ言うか、ときつくと叱



られたそうです(横田さんの直話)。

私の兄が聞いた三二年と横田さんが叱られた三四年のあいだが、滝川事件の起った三三年です。私は、中村先生はこの事件の影響で態度を変えられたと思います。

さきに申しました西田先生を批判する藤谷さんの文章は、日本史研究会の創立された四六年一二月の翌年の五月二十一日の『学園新聞』(京都帝国大学新聞の後身)に、「進歩の敵『文化史観』——西田直二郎博士の公罪——」と題して載りました。四千五、六千字の長文で、古代崇拜・過古尊重・復古史観として鋭く追求しています。

藤谷さんは日本史研究会を代表してこの論文を書かれたのではありませんが、日本史研究会の動向と無縁とはいえません。この論文が出たあとしばらくして、日本史研究会の委員であった柴田実先生は同研究会を退会されました。その後一、二年は、日本史研究会は京大國史研究室と対立する会と見なされていたと思います。

## 六 国史研究室の二つのグループ

両者が対立する関係になったのは、このような思想問題のほか、国史研究室の内部で西田先生と中村先生の仲がわるかったこ

とも無関係ではなかったと思います。これも言いにくいことですが、お許しを願って私の憶測をつぎに申します。

国史学科で上記の両先生の仲がうまくいってなかったことは、学生はよくは知りませんが、うすうすは感じていたと思います。院生のあいだでは周知のことだったでしょう。私は大阪市立大学に勤めていたときに、静岡大学教授の内藤晃さん(三五)と、大阪市大で私と同僚になられた平山敏治郎さん(三七)から詳しく聞きました。私が京大に入学したときの研究室の助手は内藤さんで、四三年に旧制山口高等学校に転出された(のち静岡大学に移る)あと、平山さんが助手となり、四六年秋まで勤められたあと、岸俊男君が引きついでです。平山さんは助手をやめられたあと、私が五〇年から勤めていた大阪市立大学へ、五一年にお見えになりました。

それより数年あとのことですが、学生をつれての見学旅行で、私は平山さんと学生と一緒に静岡市で一泊したことがあります。そのとき、静岡大学の教授であった内藤さんが宿に訪ねてこられました。内藤さんと平山さんは助手として前任と後任の関係ですから、つもる話がたくさんあり、夜おそくまで語りあわれました、最大の話題は、西田・中村両先生の仲が悪いので苦勞した、という話でした。

兩先生の仲のわるかったのは、根底に思想または生き方の原則の問題があつたかと思いますが、直接の原因が何であつたか、私にはわかりません。しかしこの対立は大学院学生など若い研究者に影響して、派閥というほどはつきりしたものとは思われませんが、西田先生に近い派と中村先生に近い派が形成されていたようです。前者の派は石田一良さん(三九)など、文化史・思想史を重んずるグループで、いわば主流派。平山さんなどはこの派に近しいと思います。後者の派は、荘園史など社会経済史・政治史に関心を持つ派で、林屋さんや岡本良一さん・奈良本辰也さん(以上三八)、また藤谷さんなどです。人数はこちらの方が多いようですが、西田先生は主任教授、中村先生は助教授ですから、傍流ということになります。

くりかえしますが、派閥というほどのものではなく、大体の傾向といった方がよいかもしれませんが、二つの傾向があつたのは確かです。確定的に申しますのは、つぎのような体験があるからです。四十六年一月か二月、進駐軍の国史・地理教育の中止の政策も手伝って、私は職がなく、ウロウロしていましたが、西田先生から呼び出され、四月から国史学科の特別研究生に採用すると言葉をかけていただきました。その直後、林屋さんから京都の国立博物館に欠員があるから推薦するが、どうかというお話をいただ

きました。私は西田先生からかくかくの話があつたと申しましたら、林屋さんはそれも悪くはないが、今の京大の研究室では実のある勉強はできない、職をもって落ちついて勉強できる博物館をすすめる、というご意見です。私は石田さんが、その時には同志社大学の助教授でしたが、四三年度か四四年度の特別研究生であると聞いていたので、石田さんにも相談して助言を求めると、言下に京大の研究室で勉強するに限る、僕もついているよ、といわれました。正反対のご意見なので、迷いましたが、慎重に考えて特研究生の道を選びました。

以上が私の体験です。どちらも私のことを思って言つて下さつたのですが、今にして思うと、お二人はそれぞれのグループの中心的立場にあつたことを示すように考えられます。

中村先生が日本史研究会の成立に関係されたわけではありませんが、私はこのようなことから、日本史研究会は中村先生に近い側のグループが主になって創立されたと考えます。

しかし日本史研究会と国史研究会の対立は、グループの対立より時の勢いといった方がよいかもしれません。同じ京大出身者を中心として構成されている日本史研究会が、独自性を明確にするには、京大国史研究室の伝統を革新するという大義を唱え、旗幟・名分を鮮明にする必要がありました。

なおもう一つ日本史研究会設立の理由として、自由に書ける発表機関がほしいという若手研究者の希望もあったと思います。林屋さんが何かに書いておられました。京大史学科には『史林』があります。日本史以外に東洋史・西洋史・地理・考古学の諸学科の論文も載りますから、若手研究者には狭き門でありました。

### む す び

その後、情勢は変化して読史会と日本史研究会の関係は修復されました。

西田先生が四六年六月に教職不適格とされ、中村先生は四八年一月に同じ理由により、あいついで京大を去られ、さらに西田先生の後継の立場にあった藤先生(この時助教)は、四八年秋に大阪大学に転出され、林屋さんとも親しい関係にある柴田先生が中心になって、国史研究室の再建が計られました。やがて台北大学から帰られた小葉田先生が教授として着任(前述一四ページ)、さらに清水さんと京大同期で親交のあった赤松俊秀先生(三二)が、助教として京都府社寺課から来任されました。そのころ立命館大教授であった林屋さんを京大に迎えることも企てられましたが、それは成功しなかったと聞きます。

このように状況が変化しましたので、日本史研究会が読史会を

批判する理由はなくなり、また京大の若手の卒業生で日本史研究会の庶務や編集を担当して働いていた人々が、京大の助手や講師となることもありました。そのころ以来、読史会と日本史研究会の友好関係はゆるぎがないと思います。

以上は私の見聞にもとづいて考えたところです。他の見方、とくに日本史研究会に関してはいろいろの見方があると思いますが、私の知っていることは、ざっと以上の通りです。

① (二八年)は、一九二八年に国史学科卒業を意味する。以下は年を略し、卒業年の下二桁漢数字で示す。

② 『国史論集』(一)、(二)。代表者小葉田淳、読史会刊行、一九五九年一〇月。

③ 例えは大会は、一年春秋二回に行なわれる時と、秋一回のときがある。

④ 野田好太郎君。のち吉兵衛と改名。

⑤ 初出した時の題名は「法隆寺資財帳の食堂及び延長焼亡以前の講堂に関する研究」。『美術史学』八〇、一九四三年八月刊。実際に刊行されたのは同年一〇月。

⑥ 清水さん逝去の報は、柴田先生以下、京大国史研究室のメンバーによる研究会が、陳列館二階の会議室で行なわれている所へ届けられた。その時の衝撃は忘れられない。

⑦ 肥後さんの論著は、はなはだ多いが、私はいわゆる欠史八代の史実性を否定した「大和闕史時代の考察」(『史潮』五一、三、一九三五年)に教えられる所が多かった。この論文は、戦後肥後著『古代史上の天皇と氏族』(弘文堂、一九七八年)に取められた。

⑧ 知遇を得たキツカケは、一九五四年の初夏のころ、赤松俊秀先生のご紹介で、はじめて奈良ホテルでお目にかかったとき、先生は「関西から『続日本紀研究』という雑誌が出ているそうだが、どこから出ているか知らないか」と問われ、「私の家が発行所です」と申しあげたら、たいへん喜ばれたのに始まる。そのころ先生は年に一、二度関西へ来て、古代の史跡をめぐっておられ五四年以後、たびたび奈良ホテルでお目にかかった。しかし慎重な先生は、なかなか作品化されず、私あてのお手紙で、「日本の古代の森は深く、その上濃霧がたちこめているので、なかなか踏みこめません。(中略)……(しかし)森と霧を水墨で描いてみようという決心だけつきました」とまでいわれたが、古代を描く筆はついにおろされず、逝去された。このことは、拙著『七十歳の峠——私の文学遍歴——』(私家版、一九八八年)に詳しく書いた。

⑨ 『家永三郎集』第一六卷(岩波書店、一九九九年)に収める「一歴史学者の歩み」に見える。

⑩ 小葉田淳「想い出の道——引揚を経験した一歴史家の足跡——」(非売品、一九九九年)にみえる。

⑪ 脇田晴子「河音能平さんを悼む」(『河音能平著作集』第三卷(文理閣、二〇一〇年)に付載する「月報」3や、その他にみえる。

⑫ 青木さんとの談話による。文章となったものもあるが、出所はいま失念した。

⑬ 早川庄八「日本古代官僚制の研究」(岩波書店、一九八六年)の「あとがき」による。

⑭ 十一月三日と思いがつたのは、その後、現在に至るまで、十一月三日に読史会の大会が開かれたからである。

⑮ 岩井忠熊「伝えられなかった国史学専攻の歴史——一五年戦争期の一断面——」

⑯ 『日本書紀』卷三、神日本磐余彦天皇(神武)が東征に当って言ったこととして、「彼地は必ず以て天業(天は大とも書く)を恢弘し、天下に光宅するに足るべし」と記している所に見える。

(大阪市立大学名誉教授)